

コンパニオンプランツの試み

徳野 雅仁

スペースにゆとりがない菜園で、多くの野菜を育てる方法として混作があります。混作は、数種の作物を同一の畝で栽培する方法で、作物同士が互いに支障をきたさず生育を助け合えるものを選んで共栄させるものです。

それは、根張りの浅いものと深いもの、草丈の大きいものと小さいもの、十分な日照を必要とするものと半日陰でも育つものを組み合わせると有効にスペースを生かす栽培法です。たとえば太陽が南から低く射す秋まきでは、畝の北側一列に背の高いハクサイなどを植え、南側に背の低いタアサイ、ラディッシュなどを栽培することにより互いに十分な日照が得られます。半日陰でも育つものはハクサイの北側で育てれば、一緒に植えても共に生長を阻害することはありません。

混作にはこのほか、一緒に育てることで病害虫を防いだり、生育に効果がある組合せがあり、これらをコンパニオンプランツ（共栄植物）と呼んで、今、もつとも注目されている安全な栽培技術です。

コンパニオンプランツとして古くから知られているのは、アブラナ科の野菜であるキャベツなどを食害するアオムシを防ぐため、モンシロチョウが嫌うハッカやサルビア、ニガヨモギ、セージを一緒に植えることでした。また、ジャガイモや、マメ類、トマトの根に寄生する線虫を退治するということでマリーゴールドは有名でした。

このように虫を追い払い害虫が少なくなる組合せには、トウモロコシとエダマメがあり、エダマメにつくカメムシが見られなくなります。春にホトケノザが繁茂する畑で虫害が少ないのは、ホトケノザに虫を忌避する成分があるからだということもわかってきました。

病害を防ぐ共栄植物として何度か試み驚いているのは、トマトとニラの混作です。トマトを植える際にニラと一緒に植え、ニラはトマトの南側に、根をトマトの方に向け接触させて植えこみます。ニラと一緒に植えたトマトは病気になるにくく、莖葉は健康的で勢いがあり、老化も遅くなります。購入時に、すでに病害に感染していた苗であっても、進行は遅く、円形もしくは不整形で暗褐色の病斑が生じる輪紋病（りんもんびょう）に感染しても、病斑部のみ円形に枯れて抜け落ち、莖葉全体は元気に回復したかのように立ち直ります。トマトはまた、キュウリ、トウガラシとも相性がよく、一緒に植えると共に元気に育ちます。

春に生長するマメ科のカラスノエンドウは土を肥やし、マメ科の作物やトウモロコシはいろいろな作物との共栄に効果があります。

コンパニオンプラントは、雑草との共生で健康に育つ自然菜園が実証するように、植物個々の性状を活かした安全栽培に役立つ栽培法です。

（イラストレーター イラストも筆者）

